さい」とか「どんどん読書しなさい」とつねに

というのも大学の講義において、「本を読みな

たしたち大学教員にとって、驚きに値します。 ったく読書しないようなのです。この結果はわ る統計調査によりますと、大学生の5割強はま にみえますが、じつは簡単ではありません。あ

本に親しむということはたやすいことのよう

習慣がおのずと身についているかもしれませ

ん。それも場合によっては、家庭環境によるで

す。テレビの影響もそうですが、スマホやパソ は、現在、読書に代わる娯楽が多すぎることで

コンを操作すると、ゲームやラインなど遊び

しょう。学生本人がどのような環境のもとで育

ったかについてみると、親自身に読書習慣があ

言っているということに加えて、自分たちの足

元がきちんと見えていないのではないかという

疑問が頭をもたげてくるからです。

ここでその社会的背景について考えてみまし

において比較的上位にある者は、おそらく読書 レヴェル以上)の大衆化という現象です。学力 ょう。ひとつ考えられるのは、高等教育(大学

## や娯楽がこれでもかこれでもかと見出されま

うな家庭においては、子どもにとっておのずと

り、ある程度本に囲まれた生活を送っているよ

ではどうしたらいいのでしょうか。各家庭の

中で読書の大切さを親が子どもにきちんと伝え

る努力が必要です。読書体験を通して得られる、

の点は、昔といまとの社会環境の根本的な違い のほうへは眼が向かないかもしれませんね。こ

す。そちらへの誘惑に弱い子は、なかなか読書

もは、そのようなわけにはいかないでしょう。

に読書環境に恵まれない家庭に育っている子ど 読書は身近なものになるでしょう。 それとは逆

本があるという家庭環境がものをいうのです。

つまり子どもが小さいうちから身近なところに

み聞かせから始めてみたらいかがでしょうか。 とすると、子どもが幼いうちにまずは絵本の読

とです。ただしそれは、親自身がなんらかの実

他では味わうことのできない楽しさを教えるこ

もうひとつ社会的背景として考えられるの

体験をもっていないかぎり、やはり困難をとも

なうかもしれません。